

第2節 王権を支えた馬

はじめに

四條畷市奈良井遺跡の発見は、昭和51（1976）年から53（1978）年にかけて当時の国鉄片町線複線化工事に伴う発掘調査で古墳時代の集落跡を発見したことに始まる。

その後、東高野街道沿いに所在する四條畷市立市民総合センター建設予定地を昭和54（1979）年9月から発掘調査を実施した。その結果、古墳時代中期につくられた長さ約16m・最大肩幅約2.5m・深さ約1mの中央溝状遺構を検出した。その溝を取り囲むように一辺の長さ約40m・最大肩幅約5m・深さ1～1.5mの方形周溝状遺構が検出された。これは古墳時代後期初頭に属するものである。この方形周溝状遺構の西約60mのところで一辺約1.2m・深さ約1mの方形板柁井戸等の遺構を発見した。

これらの2時期にわたる遺構の中で特に注目されるのは「いけにえにした馬」である。7頭分の馬骨及び馬歯はすべて方形周溝状遺構内から出土した。その中でも体長1.5m・体高1.2mの蒙古系の小型成馬がほぼ完全な形で発見されたことは注目し得る。また、同一溝内の土壌に小型成馬の頭部だけを切取って埋葬された例もあった。

このような頭部だけの出土例としては、昭和52（1977）年の大阪瓦斯天然ガス管理設工事に伴う中野遺跡の発掘調査で古墳時代中期（5世紀中ごろ）の馬の下顎骨と伴に朝鮮半島から持ち込まれてきた韓式土器が出土した。『古事記』・『日本書紀』に記述されているように渡来人の河内馬飼首荒籠と四條畷あたりの牧場が深く関わりがある。



第16図 奈良井遺跡古墳時代祭祀遺構配置図

今回の大阪瓦斯調査区で発見された溝は左記の方形周溝状遺構の続きであり、遺構全体を推察するための重要な調査成果が得られた。

今回の成果を踏まえ、四條畷一帯の古墳時代の馬がどのように四條畷に持ち込まれ、飼育され国家的存在としての馬を総合的に考えてみたいと思う。

河内国讃良郡の自然環境

四條畷市は大阪府の東北部にあたり、国定公園生駒山地北部の山麓にひろがる緑豊かな地域である。明治時代の初めまで河内国讃良郡の名が使われた。讃良郡の範囲は四條畷市全域を中心にして、北側に寝屋川市の一部と南に大東市の一部を含めた地域である。

古墳時代に朝鮮半島から最新の技術が河内国に伝わった。鉄工技術は柏原市、須恵器の焼成技術は堺市・吹田市、馬と馬の飼育技術は四條畷市を中心とした讃良郡に伝わった。牧が所在したのは四條畷市のほぼ全域と寝屋川市の南部の一部である。その距離は東西約2km、南北約3kmである。

四條畷市域にあたる山系の谷間からは讃良川・岡部川・清滝川・権現川などの川が西へ流れているが、古墳時代には「河内湖」に注いでいた。一方、寝屋川市では淀川が「河内湖」に注いでいた。この大河の流れが河内湾に土を運び湾の入口をふさぎ淡水の河内湖となる原因の一つとなった。今の大阪平野中部は海だったり湖だったりした。

馬の放牧地の広さは、馬一匹につき1～2町歩（1町＝約100m四方）必要である。土地は幾分傾斜をもち、乾燥性の肥沃土地。牧草が茂り、雑木林、相当量の清水、斜陽率50%などの条件が必要である。讃良はこれらの条件にほぼ適合する。

牧は国家的事業だったか？

古墳時代中期初頭の河内国の讃良へ朝鮮半島から馬の飼育技術が伝わった。朝鮮半島からは瀬戸内航路で難波津へ、それにつながるのが河内湖である。四條畷には、南北に横たわる生駒山系を東西にまたぐ清滝街道が走る。この道は河内湖から大和へつながる重要な道である。そして山系の西側山裾を南北に走る東高野街道と交差する。古墳時代には街道の名は登場しないが、遺跡の分布からみても古墳時代にはすでに存在していたと思う。このような立地条件からも大和王権が讃良郡に牧を誘致し、馬の機動力を軍事制度に組み入れ新戦力としたことは容易に理解できる。

船から馬を降ろした葦屋北遺跡

四條畷市葦屋北遺跡は大阪府寝屋川北部流域下水道「なわて水みらいセンター」建設に伴い約25,000㎡を調査した。その成果は古墳時代の馬牧場の存在をさらに明確なものとした（大阪府教育委員会調査）。

葦屋北遺跡は河内湖の東端にあたる湖畔近くの集落であったが、現在でもかなりの低湿地帯である。朝鮮半島から馬をつれて来た渡来人はここを終着点とした。そして牧を築き、讃良の馬飼集団をつくりあげた。

馬は準構造船に乗って

準構造船の船底などを切断して井戸枠にリサイクルした井戸が葦屋北遺跡で6基、寝屋川市長保寺遺跡で3基出土している。そのなかには西都原式準構造船と想定される船材もあった。外洋航海も可能なこれらの船に馬を乗せて朝鮮半島と河内湖を行き来していたのだろうか。

四條畷市では馬骨・馬歯の出土は普遍的であるが、葦屋北遺跡では集落から遺存状態の良い馬1体が横たわるようにして出土した。体高124cmの蒙古系である。この馬は死に際し廃棄されたものではなく丁寧に葬られたものである。現在、現地管理事務所建物壁面にレプリカと案内説明板を設置して公開している。

その他の集落からの主な馬骨としては、中野遺跡より井戸内の中位堆積土層から板材の上に乘せた馬頭骨が出土。頭骨の上には石と土器が置かれていた。これは井戸の廃棄に伴う祭祀である。また、大阪瓦斯天然ガス埋設に伴う中野遺跡の集落内で火を使う祭祀に使われたものであろうか、焼け木とともに下顎骨が出土している。この馬骨が四條畷で最初の発見となった記念的な馬骨である。今から35年ほど前の調査であったが、馬飼集団の話などさほど注目されることはなかった。また、各遺跡からは渡来人がこの地に根をおろした証拠となる陶質土器や韓式系土器が出土している。

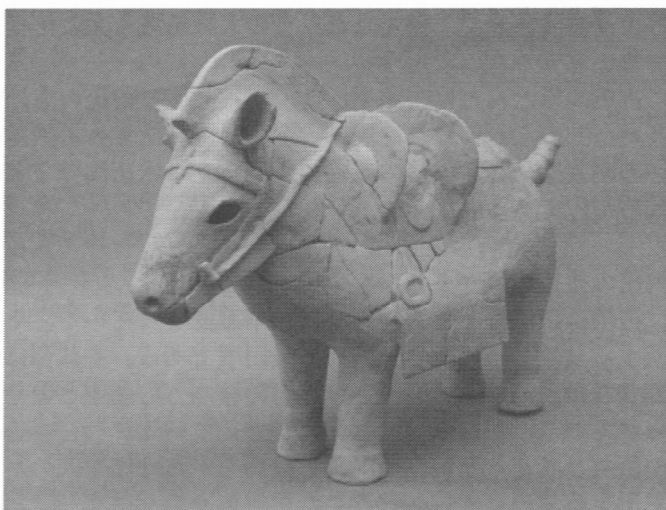
馬形埴輪とうりふたつの馬具

葦屋北遺跡では馬具の出土もみた。馬の口にかませる鉄製鑣轡、乗馬の際に脚をかけるカシ製1木造りの鐙2点、そして黒漆塗り木製鞍が出土した。これらの馬具は古墳出土のきらびやかなものではないが、牧で使った実用性の高いものだ。

精巧なつくりと美しい光沢を放つ漆塗り鞍は馬飼集團の首長クラスのものだろうか、後輪のみの出土であるが、木製鞍としては最古級である。

南山下遺跡出土の馬形埴輪は、ずんぐりとして足が短い。この馬がつけている馬具は先述の出土品とうりふたつ。

蒙古系の馬の体形や表情、馬具などの装具もよく観察されていて忠実につくられた埴輪だ。馬具の出土によって埴輪の資料的価値も高くなった。あと雲珠が出土すれば埴輪がつけているすべての馬具が揃う。



第17図 馬形埴輪
南山下遺跡 古墳時代中期 高さ54cm

豊富に得られた馬の飼料

馬に与える飼料は、水辺に生える草、そして難波海から得られる塩である。塩を焼く製塩土器は、表面にタタキ目が施された高さ7cmほどの小さな筒形の土器で、その器厚はごく薄く2mm程度である。葦屋北遺跡では土壇（約6.1m×2m、深さ0.7m）から約67kg出土した。個数に直すと1,500個分になり、日本一の出土量である。奈良井遺跡では、2m×1mの石組み製塩炉も確認されている。石はこぶし大の花崗岩である。

各遺跡では鉄製品だけではなく鉄滓や羽口の出土もある。儀式に必要な玉づくりもしていた。水田では稲作をし、牛を使っていた。讃良の馬飼集團は牧で使うすべてのものをまかっていたのだ。

讃良の馬飼集團の祀り

奈良井遺跡や鎌田遺跡の祭祀場では馬を生け贄にして祀りをしていた。大切な馬を犠牲にするのは忍びないことだと思うが、牧の繁栄を願う強さのあらわれなのだろう。祀りではスリザサラを奏で、玉や木製の矢や刀が捧げられた。儀式のハイライトは、馬の首を切り落とす瞬間だっただろう。奈良井遺跡では、一辺40mの方形台状をとり巻く溝から7頭分の馬が出土した。生け贄にされた馬の首は、今切り落としたかと思うほど生々しい。板に載せられた馬1体も出土したが遺存状態は悪かった。他に、36個の滑石製白玉入りの須恵器大甕、ミニチュアの人形12点・馬形5点、馬の飼育道具のブラシとムチが出土した。鎌田遺跡では、金製垂飾の1部も出土している。どちらの遺跡からも陶質土器や韓式系土器が出土している。



第18図 いけにえにされた馬の頭骨
奈良井遺跡 古墳時代中期 推定年齢14歳

山裾に古墳群

馬飼集團は山裾を墓地に定め古墳群を構築した。この場所に立ち西を望むと讃良の牧や河内湖はも

とより難波津まで一望できた。今の大阪市域や大阪湾である。死者は朝鮮半島と河内を行き来する船や牧を見守ったのだろう。

古墳のほとんどは方墳や円墳で規模も20m前後のものがほとんどで、古墳時代後期に属するものが多い。そのなかには馬を周溝内埋葬していたものも数基あるが、馬歯のみが残るだけで遺存状態は悪いのが残念である。後の時代に寺院建立や水田開発などで削平されており、ほとんどの古墳は周溝が残るだけである。

馬飼の首長の墓か？

古墳群における前方後円墳は数基確認されている。その代表的なものとして、大上3号墳は後期に属する全長45mの帆立貝式前方後円墳である。主体部は確認することができなかったが、二段築成の葺き石は良い状態で発見され、石の積み方も基本どおりであった。濠が二重に取り巻く可能性も考えられており、かなりの人物の墓と考えている。『日本書紀』の継体紀の条に登場する河内馬飼首荒籠の墓だと考えると面白い。荒籠は馬を走らせ渡来人のネットワークで情報収集し、越前国三国のオホド王を継体天皇即位へと導いた馬飼集団のリーダーであった。

この古墳付近は谷地形となり旧河川が流れ、大和につながる古道清滝街道が走っている。川跡では韓式系土器を使った祭祀跡があちこちで確認されている。湖畔から山裾まで讃良の馬飼集団の生活範囲だったのだろう。

まとめ

長年にわたる発掘調査によって讃良の牧の姿がビジュアルになった。今から1500年前、河内湖のほとりに船が停泊した。渡来人は船からゆっくり馬をおろし、馴染みの人々と握手をかわし、夜には酒を酌み交わし談笑した。川筋では馬がゆっくりと草を食んでいる。馬飼が馬に塩を与えたり、井戸から水を汲んで馬に与えている。空には韓カマドの煙が立ちのぼっている。女性たちが食事の準備でもしているのだろう。祭祀場では、スリザサラが奏でられるなかで、馬の首が切り落とされ生け贄にされている。山裾では汗をかきながら石を運んでいる。古墳造りで忙しいのだろう。それを尻目に川辺では今日もまつりをしている。牧で育った良馬はブラシで毛並みをそろえ、たてがみを編み、化粧されて、大王のもとへ届けられる。馬飼は寂しさと晴れやかな気持ちが混在したであろう。

大和朝廷が原初的な国のまとまりをつくり上げるためには、馬が重要な役割を果たしたのに間違いないと確信している。馬の重要性は益々高まり、その後の時代まで続き、昭和初期まで軍事・運輸・通信にと活躍した。しかし、讃良の牧は奈良時代には姿を消していった。

(野島 稔)